

---

# 平行結晶

オル＝トロス・クラフト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

平行結晶

### 【著者名】

N4620P

### 【作者名】

オル＝トロス・クラフト

### 【あらすじ】

しがない少年がいきなりジョブチェンジ！？そして始まる物語……  
かなり雑な連載作品です。

今時ありげな…それでいて、その発想はなかつたわ～を曰指して頑張ります。

嘘です。面倒くさがり屋の駄目一流なので相当間が空きます。

## プロローグ

「 前を見れば、盾を持つた綺麗な骨、先に進めば、剣を持った傷だらけの死体 」

そこまで読んだ所で不意に声をかけられた。誰かと思い少しの期待、そして多少の倦怠感を持つて体を向けるとそこには、やはり…

「おーい、蒼騎」

そう言つて何時もながらのハイテンションでこちらに来た。

「何を読んでいるんだ？」

こいつは自分の親友（悪友）の紅闇 翔太。くねやみ しょうた容姿は短髪で割と癖つ毛な方。性格は常時ハイテンションの友好的だ…付き合う方が気疲れする位の…しかし何にせよ親友だ。

「これが。えっと……【選択】だつてさ」

そう答え、もう一度本に目をやる。どうも納得がいかないのか、無理矢理本を置かせて両肩に手を掛け、自分の目を凝視してくる。正直逸らしたい…

「今日がどんな日か分かつてんのか？やつと来たんだーこの日がさ」「嬉々として…ともすれば、狂氣的に話し出す。自分は別に待つていたつもりもなく、更にいえば面倒なので諭す。

「落ち着けよ。まだ始まつてすらないのに、それにいくら待つてもclassは運だと皆言つてるぞ」

そう諭しにかかるが、自分の話術が下手なのか、どうも無駄な徒労に終わり時間をふいにした。ふと思つてみる。もう17年も経つた、来てみればなんとなく寂しくもあつたが、翔太の言つとおり浮かれたくもあつた。此處は【Area】のガーデン。更に詳しく現在地をいうと、南部に位置するちょっとした都市スペルタウン、特に不足したものも無く、かといって全てが潤沢という訳でもない。言つてみれば平凡、か。今日は【キュア】の投薬日となつていて。【キ

【ニア】は人間の本来持つ能力を引き出してくれる薬。その目覚めた能力には一応位があり、2nd～7thまで存在する。上位にいく程希少な存在になる。セイバーの人も来るらしいので少し楽しみだ。セイバーというのは治安維持の為に世界で組織された、しかし何処の国にも所属していない軍隊組織だ。愛国心が無いと言わればそれまでかも知れないが、体面を気にせず行動出来るセイバーは憧れもある。しかし、そのセイバーになる為にはclass4thは最低でも要るらしい。これはあくまで希望だが、class4thは欲しいと思う。

「お前の気持ちも解からなくもないけど、あと少しだから我慢しろよ」

「そうだな…まあ、言つても早まつたりしないしな」

そう言って、静かになった。

そしてその時はやつてきた。しかし一斉に投薬されるのではなく、順番らしい。そうなつては仕方が無いので、本を読むことにした。「その選択、選んだキミのその体には、天使の如きその翼」  
「キミは迷い、何かを手にその先を目指す。その果てに見える更なる何かはキミの、ために」

其処まで読むと気づいたのだが、翔太が居なかつた。席の順番で呼ばれたらしい。少し待つていると、そこそこの笑顔で翔太が戻ってきた。

「やつたぜ、俺もやつと能力者だ。まあ3rdだけど。でもよ、もうそろそろお前の番だろ」

class3rdは高度な身体限界の引き伸ばし、もしくは簡単な念力（スプーン曲げ程度の）や五感の強化が得られる。翔太の運動神経は元々高いので前者ならばとんでもないことになる気がする。

「確かにあと2、3人つて所だろ」

と何気ない会話を交わしていると、

「蒼雅…隼騎さん？あ、君…」

若い女性、というよりも女の子のような聞き慣れない声がして、少

し違和感がした。此処は高年学校なので16歳から大体20歳前後の人しか居ない筈なのでおかしい。

「お、やつと呼ばれたな。そうそう、セイバーの人って多分俺らより年下だぜ」

にわかには信じがたいが、能力は国によつて投薬年齢が違うのと、能力次第で誰でも入る事が出来るセイバーの体质を考えれば変ではない。

「ああ、じゃあ行つてくるよ」

そう言つて教室を後にした。確か別館の予備の教室が使われるらしく、到着して扉を開けると、2人のガードがいた。ガードとは基本的に国内限定の治安維持組織で、軍隊ではない。

「よし、ではこちらに来てください」

そう言われて案内された所は密室の上遮光、防音、防振が見た感じで分かる部屋だった。予備とはよくいったものだ。明らかに専用の施設じゃないか…中にはセイバーと思われる人が居た。ヘルメットのせいで顔は窺うことは出来なかつたが、声で十分女性というのは判る。何故顔を隠すのかは少し気になった。そんな些細なことを思つていると、

「あの、腕を出してください」

凛とした声で言われ、さつき抱いた疑問は消えてしまった。そして僕は袖をまくり、腕を出し備えた。二の腕に駆血帯を巻かれアルコールが塗られ氣化熱で少し冷えた。少し待つて腕の痺れとともに血管が浮き出てきたので、針が刺された。医学書で昔見た、正中静脈だと思うが、刺すような痛みが腕に走った。まあ、実際に刺されているのだから洒落にもならないが。数秒間の痛みの後に針は抜かれた。そのすぐ後から強烈な目眩が来て目の前が、暗くなり、体からは全ての力が抜けていく。まずい、呼吸まで、苦しい。

「誰…か…」

そう言つたつもりだつたが、周囲の人にはあまり聞こえていなかつた様で、残念だ。何故だろう、急に視界が広くなつた、気がした。

ガードは少しうろたえている様で、可笑しい事にセイバーの人が一番焦つていた。そんな風にしていると、急にふと眠くなつてきて目を閉じることにした。

漆黒そして静寂、明るいな、静かだ、とても綺麗だし、ずっと居たくなる、誰だ？あんな遠くにいるのにどうして声が、聞こえる…違う、声がするのはあそこじゃない、ずっと近く、頭の中…壊れて消えていく？これは夢なのだろうか…瞼が開いた。

「此処は

「

何処、と言いたかったが、声がかすれでうまく出ない。

「水…を

そう言いつとすぐに持つてきてくれた。渡された水を思考ではなく本能で飲み、一息ついた。

「ありがとう」ゼニコです。えっと？

「雛乃 銘です」

「雛乃さん、自分は、蒼雅隼騎と言います」

「はい、存じております」

名前を呼んだ位なので当然か。性別はともかくとして…

「それはなんというか…話は変わりますが、此処は一体何処ですか

？」

「此処は、貴方の学校にある保健室ですよ

少し呆れた様子で言われた。

それは仕方がない。先生とは割と会うし、仲も良いのだ。だが…利用は全然していない健康体なのだから…

「ところで…何故貴女は此処に居るんですか？」

「それは、貴方が前例の無いイレギュラーですから。念の為に此処に居ます」

確かにそれはそうだ。能力が制御できないと大変なことになる可能性は無きにしも非ず。得策であり定石だらう。

「そう言えば、自分のclassは幾らですか？」

今度は冷静になつてきたら気になつた質問を投げかけてみた。

「貴方の class については、不明でして…もう支障が無い様で  
したらこれから調べます」

まあ、そういうえば試す事無く倒れてしまった。だが、今の調子なら  
問題は無いだろう。

「それでしたら、多分大丈夫だと思いますから、このまま戻つて検  
査してください」

「分かりました。では戻りましょう」

「はい」

そしてまた部屋に戻つてきた。到着すると中心部分に連れて行かれ  
た。

「何か思い浮べて下さい」

いきなりそう言われても…仕方が無いので【選択】の中の一文節を  
思い出した。

「その選択、選んだキミのその体には、天使の如きその翼。」

そう思つた…その時、何か言い知れないような悪寒にも似た感覚が  
体中を走つた。その後背中に違和感を覚えた。少しスースーして変  
な感じになつた。周りは何か、驚いているようだつたが、何かが起  
こつているのは背中。自分では分からぬ…ガードの人気が鏡を持つ  
てきてくれてそこでやつと確認出来た。

「何だ…これは、氷…」

驚いた。氷、それは自然物…

「class6th!？」

思考が導いた答えが思わず言葉になつて出てきました。class  
6thは自然界の物質を創造、発生、形状変化等が可能なかな  
り希少な class だ。ちなみに class は 5th 以上になると  
極端に人口が減り、最高位の 7th は確かに自分が知つてゐる限り  
二人しか知らない。

「雛乃さん…この事は…」

「絶対に、秘匿です」

「それは勿論。でも、自分は、これから一体…」

ろくな考えも浮かばず、言葉に詰まってしまった。

「とりあえず、今は安心してください。報告はしますが、今すぐごどつにかかる訳ではないので・・・」

心境を察してくれたのか口調は穏やかになつたが、向こうも同じく悩んでいる様だった。

「とりあえず新しい制服を用意いたします」

そう言ってガードの一人が持ってきてくれた。ろくに考えが回らない今でも分かる。流石にこのまま戻るわけにはいかない。手を貸してもらい、背中の氷を引き剥がしてから、渡された制服に袖を通す。サイズは合っているが、やはり何かが足りない、そんな感じだった。そしてこれ以上ここに居る理由は無いので、戻ることにした。

## プロローグ（後書き）

質の悪いプロローグで申し訳ありません。  
一応月に一回更新できればまともなものでのお暇がある方は  
日辺りにお立ち寄りください。

## 一話(前書き)

豫定注意DEATH

# 一話

とにかく、何故か *class6th* になってしまった。これからどうしようか…やはり家族には言つた方が良いのだろうか、セイバーになるのか多分無いと思うけど、暴走なんてしないはずだが…そうして答えの出ない考え方をしていると教室に着いた。

「お、帰ってきたか、遅かつたじゃん」

それは、何時間か気絶…なのかは判らないが、意識が無かつたのでその分時間が掛かつたのだろう。

「ちょっと手違いがあつたらしい。てきとうに待っていたから気が付かなかつたよ」

「何だ…まあ、いいや。早速 *class* 教えてくれよ」

「え、ああ、その……」

本当のことは勿論言えないが、かといって上手い言い訳があるわけではない。どうしたものか…

「別に良いじやん。俺も教えたんだから」

「2nd… そう、2nd。何かは良く分からぬけど、体力限界の向上らしい」

そう言つて流すしかなかつた。すると

「なんだ…残念だな…」

「まあ、良いんだよ。特にセイバー ガードになりたい訳じやなかつたから」

これ以上会話が広がらないでほしい、心から願つた。すると、願いが叶つたのか先生が来た。

「本城先生、後で身体検査お願ひします」

この本城先生は担任であり、保健室の先生だ。そのお陰なのかは判らないが、風邪で休む生徒はこのクラスには居ない。

「ああ、蒼騎君… 分かったわ、じゃ後で」

この蒼騎といつ名は自分の愛称で、呼びやすいからといつ理由らし

い。

「有難う御座います」

何か意味深な間を残したのが気になるが、了承を得られたので良しとしておこひ。

「ではでは、HR始めます　」

「あ・・・」

HRが終わってもさつきからため息が非常に多く出る。どつしたものか、何にせよ・・・

「　　い

「おこ」

「蒼騎、聞いてるか?」

「え?ああ悪い...」

心此処に在りらず。まさにそんな言葉の通りだ。

「何か変だぞ今日のお前

「ふう...そうだな。おつと、じゃあ此処で。またな」

「おう。また明日」

翔太と別れ保健室の扉を開ける。

「失礼します」

白衣に着替えた本城先生が椅子に座っていた。

「待つてましたよ、蒼騎君。まあ、まずは座つて

椅子はこの保健室には何故か先生用の物しかない。ちなみに先生の私物らしい。

「はい。そういうえば、先生はこの事を雛乃さんから?」

「雛乃さん...それって何方かな。あ、もしかしてずっと彼方に付き添つてたあのセイバーの?」

「はい、そうです」

「へえ...あの女の子ね。優しいのよあの子。蒼騎君が倒れてからの時間一緒にいたし

「そつだつたんですか...」

今度会えればお礼を言わなければな。会えればの話だが...

「はい、準備できたよ、」口元に来て、「あ、はい」

こうして、諸々の健康診断と念の為と言われ【ケア】を受けた。【ケア】は先生の能力で細胞を活性化させ、治癒を行う技らしい。病院であつたら名医になれただろうに…

「はい、終わり。半分はよかつたわ。健康そのものだもの。そして、半分不思議。どうしてあなたのかな？」

「さあ…自分にも良くなればせんが、ケアのおかげで体が軽くなりました」

「ま、お大事にっこことで体には気をつけてね」

「はあ…では、失礼しました」

微妙な感じだ。ああ、今能力を使つたらどうなるのだろうか…やめた。騒動になるだけだ。それより家に帰つてからどう言い訳をするべきだろうか…やはり 2nd になつたで通すのが一番都合が良い。遅くなつたな。部活でもないし、こつちから言い訳したほうが良さそうだ。何だかな…

「はあ…」

ため息をついてしまう。何度も思う、疲れた。と…  
ふと扉を開けたら、姉さんが居る。

「おっそい。遅いのよ！隼君。折角楽しみにしてたのに～今すぐこの 1st 教えなさい、幾ら？ 2nd、3rd？」

ショートカットの髪と何時でも真っ白なカッターを着た姉さんが迎えてくれた。嬉しくもないが…

「何で、低いのが前提なの…まあ、2nd（実際は 6th だけど）だよ。当たり、良かったね」

「良かったね…ってなによ。ちょーーつとは期待してたのになあ…」

「そういう事だからさ。じゃあ、僕は部屋に居るからね」  
そう言つて家に入り、階段を上がつて部屋に入り、鍵を閉める。そして、少し考えてみる。この能力について…知ろう。いや、知らなければ…もしかすれば危険かもしれない。自分でなく大切な

ものも失うかもしれない。まず、手始めに何をするか…

「隼君～！」飯出来たよ～！下りといで～！」

その前に「」飯を食べようかな。とにかく、考え詰めても出ないものは出ない。それならば食事を採つた方がよっぽど有意義だ。階段を下りてリビングに行く。

「姉さん、母さんからはまだ連絡無し？」

母親は仕事の都合で世界中を飛び回つてゐるらしい。外交関係と言つていたが、詳しくは分からなかつた。深く知るつもりも無かつたが…

「うん、そうだよ。あ…それ持つて行つて」

「あ、うん。分かった」

おつと、ちょっと多いな。まあ行けるか…そこそこに苦労しながら運び終えて並べた。

「それにしてもさ、隼君。2ndってことは何が上がつたの？」

「えつと…まあ、視力のとかの向上かな」

「かな…って。まあ、良いけど。どうせお姉ちゃんなんかどうでもいいんでしょ」

「それは無いよ。これ以上家族が欠けるのは」免だよ」

「そうね。隼君つてやっぱり優しいね」

なんとなくむず痒い気持ちになつたので、急いで食べた。

「さて…と、美味しかつたよ。」ちちうひま。食器持つて行くからね

「流石私の弟～」

そして軽くシャワーを浴びてから部屋に戻つた。すっかり慣れたため息を一息ついて、改めて鍵を閉める。

「さて、どうしようかな…」

まあ、考えるよりやつてみよう。まずは、基本なのかは分からないが、球体。集中して瞳を閉じ、創造する……丸くて無駄の無い形、大きさはテニスボールくらいかな……冷たい。閉じていた瞳を開ける、すると

「出来た？」

その手には、ちょっとといびつではあるが、しっかりと球体だった。まあ、思ったよりすんなりいった。ならば、他の形もやってみよう。四角錐、五角錐、多面体、ダイヤカット……基礎的な形は殆どやった。解った事は、自分から、もしくは、無機物。ただし、自分が触っているものからしか出せない。

形に制限等は、ほとんど無い。今日の処は此処までかな……詳しくはまた試そう。結構眠くなってきたし、そう思しながらベッドに入つて電気を消した。

一話（後書き）

短く雑ですが何卒ご贔屓にお願いします。

暗い……何も見えない？動かない……何だ、これは……痛い、煩い、頭が……怖い……

「うわああ！」

これは、酷い……耳鳴りか？何だつたんだりう……さつきの、まだ少し耳鳴りがしている。何だか無性に喉も渴いた。そのせいかな……何か飲もう。そう思つて台所に行く。

水を飲むためにコップを取つて水を注ぐ。一口飲んだところでふと気づき、それを見て創造してみる……凍れ。すると徐々に冷たく、そして硬くなつていった。そういえば試してなかつたことがあった。溶けないのでどうか……溶けない。凍らせるだけらしいな。この能力は、ちよつと厄介だな。さて、このコップどうしておこうかな……散々考えて結局部屋に持つてきた。もういい、寝よう。そしてもう一度布団をかぶる。

「明るい。と、朝か

まず布団から出る。そして着替えて台所へ行く。勿論昨日のコップも持つて……それからぱっと朝食用の食材一式を出してから、まず卵を茹でる事から始め、並行してツナやハムをパンで挟み、茹で上がつた卵は潰して、マヨネーズで和えてからパンに挟み弁当としてサンドイッチを作る。

次に朝食としての食材を取り出す。卵やベーコンを出して油を引いたフライパンの上へ置いていく、手馴れた作業だもう何の苦も無い。トースターにパンも入れ、皿を出し、今度は姉さんを起こす。多分今回も……と確信を持ちつつ和室へ

「姉さん、朝だよ

そつは言つたが、反応が何も無い。今度は力を入れて体を揺さぶる

「姉さん！朝だ、起きて」

とやうすると

「なに～？」

やつと起きたか…姉さんの寝起きの悪さに関しては折り紙つきだ。

「い」飯出来るよ。起きて

そのまままだつたらまた寝られるのは田を見るのは明らかだ。即座に布団を引き剥がす。

「寒い～こつちは低血圧だよ」

そんな報告は聞いたことが無い。それにそんな兆候も無い。

「このまままだつたら、『ご飯が冷めるよ

「あれ～今つてそんな時間？」

「そんな時間わ。起きて、着替えて。また寝ないでね

寝起きが悪いとはいえ、多分起きてくるだろう。

「さて、後一仕事…」

朝食の仕上げにかかる。料理を皿に乗せて、バターとジャム一式と共に持つていいく。食卓に着くと姉さん、テーブルで寝ている。起きて來てもこれじゃ意味が無い。持つて来たものを全部置いてから再度起こしにかかる。

「ほら、起きないと

「うつ…うつ…そうだね。起きたよ」

案外一度田は上手いことつたな。

「起きたなら食べよ」

「うん」

それからものの10分も掛からず姉さんの皿は片付いた。

「姉さんはいつも食べるの速いね

「おかわり

「量も多いし」

「早く」

「分かつたよ。少し待つて」

台所に行き、弁当の残りの姉さんがこつなることを見越して作ったサンドイッチを持って来る。

「はい、お任せ。後、これお弁当」

「ありがと」

「じゃあ、僕は学校に行くから」

「行ってらっしゃいのキスは要る?」

何があつても要るわけが無いだろ。」

「要らないよ」

バッグを持つて玄関に、そして靴を履いて、外に行く。今日も遅れ気味だ。姉さんを起こす時間早めた方が良いかも知れない…何時も思うが、無理だな。あれで限界だろ。そんなことを考えていると思いつか早く学校に着いた。

階段を上るとき、ふと職員室が騒がしくなつていたのを疑問に思つたが、そのまま教室に行つた。殆ど皆居る。遅刻一步手前か…危なかつた。

「おお！蒼騎良かつたな！」

朝からハイテンションだな。ある意味では見習つべき点なのかも知れないが…

「一体、何が？」

「いや、さつき先生達が急遽今日の日程が変わるつて

その時、勢いよく扉が開いた。

「ごめんね～皆。なんだか今日、予定変わっちゃつた

「ええ…」

「マジで…」

「楽になつた！」

クラスが少し沸いた。が…

「社会見学だつて」

「……」

途端に静まり返つた。さて、社会見学とは言つたものの何処へ行くのだろう…

「ああ、それと…何処に行くかはね、class研究所でclassについて学ぶの。去年は無かったのに…」

何か腑に落ちない。何故ふとそんな風に思つてしまつたのか…まあ、

ただ思うだけならいいか。

「あれ、もうこんな時間…皆そろそろ集合して、バス準備できたつて」

「何だらう、今日は一体自分にも、それどころか先生にもよく伝わっていないみたいな処を見るにかなり胡散臭さが拭えない。しかし、学校絡みで何かが起ころわけでも無いだろう。軽率な判断かもしれないが、あまり重苦しい考えは可能性を潰してしまう。

「さあ…まあ、良いんじゃないかな?」

「そうだな。授業も潰れだし」

教室から移動して、皆は続々とバスに乗っている。早くしないと席が無くなってしまう…

「早く行こう」

「おお、そうだな」

運が良いかは個人の判断次第だが、前のほうに座ることができた。これで先生から何か訊ける。

「先生…」

「何、蒼騎君?」

「今日は何でまたいきなりこんな風に?」

「さあ、私にも解からないわ。はあ、お腹空いた…」

「先生がそれですか…」

「朝は苦手なのよ。食べてはいるけど、ビーフしても量が入らないのよ」

姉さんよりましだが、姉さんみたいだ。それにしても結局どうしてこうなったのだろう。結局解らないままだ。それでも長いな…眠くなる。寝かかったが、残念ながら着いてしまった。

「蒼騎、着いたな」

「ああ…着いた」

外を見ると、大きな建物があつた、此処がclass研究所…にしては中途半端な大きさだ。世界全土に影響があるclassを研究

する所にしては小さいと思う。しかし、こんなものなのだろうか…

「はーい皆、降りて降りて」

普通一番先に降りるのは、先生…

「降りたら並んでね。写真撮るから」

其処でそんな事を降り損じた俺達に今から言つたか。4、5人しか聴けて無いぞ今の言葉。もう何度曰だらうか、こうゆう風なことを思うのは…何とか全員に伝えて無事に写真を撮り終わり、それから皆そろつてエントランスに向かつた。

「ここにちは、今日皆様のガイドを担当いたします・・・あれこの声は…」

「雛乃」

さん！？

「銘です／／／」

かなり、驚いた。確実に幼年学校の高等性（14、5歳）が案内員の制服を着ている…周りが気にしていないことが一番驚いた。

「何だよ、あの人知り合い？」

「あ、いや…人違いだ」

知つてゐるだなんて言えない。言える訳が無い。朧氣ではあるが、納得がいった。そういう事か…これで今日こいつなつたのか。

「理由が解つたよ」

「何の？」

「多分俺のせいだ」

「は？何を言つてるんだ」

「そう見えるかも知れない」

「まあ、いいや。それより遅れちまつぞ」

「そうだな。急げうか…」

「こちらがメインの研究用ラボです」

「うわー」

「へえ…」

「スッゲー」

皆それぞれに楽しんでいるようだ。

「うわ、これ…」

何かの紙を見て雛乃さんが嘆いていた。彼女にはこうゆう事は合っていないのだろう。直感でそう思つた。そのすぐ後に

「皆様、此処で、特別に抽選でお一人にセイバーの制服のレプリカをプレゼント致します」

「うおー欲つしいぜーー！」

翔太、多分皆そうだ。

「それって私もありかな？」

先生は十中十で無理だ。そんな心の中の葛藤をしている内に時間は過ぎたようだ。

「では、抽選の結果を、お伝えします」

さて誰か、先生はまず無いだろう、翔太はクラスの数からして、30分の1位の確立だ。かくいう俺もそう変わりはしないだろうかな。

「はい。蒼雅隼騎さん」

なんだ、驚く程に 実際に驚いているが…あっさりと呼ばれた。

「こちらへどうぞ」

あれ…此処ではないらしい。

「解りました」

「いいなあ、蒼騎」

「本当よ。蒼騎君」

「まあ、運次第だったからな」

さつと雛乃さんの所に向かう。

「それでは此処へかけて待つていて下さい」

心なしかぎこちないやつぱり合つてないのだろうこういう事は、暫くして雛乃さんともう一人が来た。もう一人の方はマントをはおつた人か…ただ、纏う気迫が只者ではない。押し殺してはいるが、気圧されそうだ、そういえば本人ではないが、雑誌か何かで何度も見たことがある。風奏卿とされるclass 7th 鈴谷 嶋の等。稀に雑誌に載っている。何故彼はこんな所に…

「まずは、【おめでとうござります】と言いますか？」

「最初から必然ではないですか？」

「良い勘をしています。ヒメもそう思いませんか」

「はい。彼は思考が鋭く、常人よりも冷静です」

「雑乃さんの話し方が変わった。張り詰めた…といった方が正しい。

「それで、ただ景品の服を頂くだけでは無いんですね？」

「ええ、そうですよ。貴方は自分が思っている以上に高位な能力を持つているのですよ」

やはり…それで此処まで色々としたわけか。まさかとは思つ。しかし、これが現実なのか…

「それで自分に何をしろと？」

「命令等とでは無いのですが、一応…ヒメ」

「はい。貴方はclass6th、このclassが見つかる確立は約5000人万分の1です。セイバー内にclass6thは20人も居ません」

「思ったより、少ないですね」

「反セイバーの組織も在りまして、その方にも能力者は居ますから…」

「その前にセイバーに入れ」と？

「その…できれば、ですけど」

遠くからではあるが、轟音が響いた。恐らく衝撃は凄まじいのだろう。何だこの揺れとすゞい音は…？「おや、まさか奴等に来られましたか…」

「これは、こんな……」

「ヒメはひいつ奇襲は初めてですか?」

「初めても何もありません! 奇襲ですよ……」

「それよつもな話は……」

「（）安心なさい、私が行きましょ（）」

鈴谷さんに行くのなら、安心だ。

「申し訳ありませんが蒼雅さんは此処に居てください」

そつ言い、離乃さんも何処かへ行ってしまった。

「……解りました」

此処に居るだけで何も出来ないのか、僕は……  
おや、何だこの音……近い、どうするか……考えていると、ふと小包が  
目に入った。失礼だらうが、何かの役に立つかも知れない。  
これは、セイバーの服じゃないか……本当に景品としてあつたのか。  
だが、これは好機だ。制服の上一枚目だけ脱いで、そこにセイバー  
の服を着る。上手い具合に顔が隠れるヘルメットもある。ただ武器  
が無い……通常は電圧の低い警棒のスタンロッドを持っている筈だが、  
そこまである筈はないか。

どうするべきか……そうだ、作ればいい。短時間ならば氷で……いや、

表面だけでも作り続ければひょっとしたら半永久的に持続できるかもしれない。それならば、このままいつても大丈夫なはずだ。

そして走り出す。皆の所へは鈴谷さんが行つた。ならばこれ以上は無駄な手出しだ。それならばさつきの音の方に速度を速める……

そろそろ着く頃だが……此処か。ものの見事に爆破され、壁が無く、瓦礫が散乱している。何の部屋かは知らないが、もう研究は出来ないだろう。誰か、コートに身を包んだ男が居る。どうやら一人のようだが……あれは、離乃さん。だいぶ消耗しているようだ、何とか隙を突いて攻撃できれば一人くらい何とかなるだろう。それならば武器を作ろう。形状は刃物で……出来た。軽く反った形の細めの刀。取り回しは中々良い、いけるか……そのまま飛び出して、全力で斬りかかる。その時に気付かれた。もう少し……

「はああ！」

縦に剣を振りかぶった瞬間、真後ろに刀が動いた。鞘に力を込めているので刀は真ん中から折れてしまい、空を斬った姿勢で硬直した隙を衝かれ、正拳突きをされた。痛みは大して無かったのだが、かなり遠くに飛んでしまい、パニック状態のまま背中から崩れ落ちた。

「蒼雅……さん！？」

「離乃さん……其処から下がつて下さい……」

刀は折れてしまつたが、新たに刃を伸ばす……が、それも叶わなかつた。刀の刃は途中で止まり、真ん中から折れた。何だ、奴の能力は……それから離乃さんの能力も知りたいが、そんな暇は無いだろう。

雛乃さんがこっちに来た。

「何をやっているんですか貴方は…」こんな、事…」

よく自分の体を見てみれば、存外に服が破れていた…やはりレプリカ。傷は無いのだけど…

「雛乃さん、すいません。今の自分には…これしか、出来る方法がないんです」

「でも…もつ大丈夫ですか…」

その言葉は全く信用出来ない。完全に空元氣であることは明白だ。

「此処くらいしか無いんですよ。自分が居るべき場所は」

「さて、何処の誰とも知らないが…貴様は民間人か?」

「今のところはですけど…」

「セイバーになるのか?」

「この格好をどう受け取るか。解ると思つが…」

「そつか……ならば、これを受けてみる…」

まずい。奴が自分の折れた氷の刃を幾らか持つてこちらに投げる。速度が半端ではない…雛乃さんは突然近くの瓦礫が動いて彼女の前に倒れた。自分の方は間に合うか…刹那の間で、頭の中に即座に思い浮かべる。平面、六角形、なるべく大きく…

「アイ…ギス…！」

思わず目を閉じてしまった。神の盾のつもりだったが、使う人間がこれでは駄目だな…

「う…」

浅い方だが、手のひらが痛い。自分の出したアイギスは、刃に貫通されていて周りはひびが入っていた。幸いなのは自分の手は少しばかり刺さっているだけだった。

もうアイギスに意味はない。無理やり引き剥がし、再び剣を作り、奴へ向かって走り出す。そして突然止まり、左手からダガーを作り、そのまま投擲する。が、またしても届くことはなく、そのまま投げた軌道で戻ってきた。

「何！」

横に跳んで避ける。避けることが出来たが、いまだに勝機が見出せない…その時、

「目的はもう達成している。遊びに費やす時間は無い。それでは、ヒメ…」

奴はそう言い放ち、軽く地を蹴つて、そのまま空に飛立つて行った。体が、糸を切ったマリオネットみたいに墜ちていく…

「蒼雅さん…蒼雅さん！起きてください」

とても怪我人に行つと思われる限度を超えて搖さぶられる。大して

動いたわけではない。それなのに身体が痛い…痛いのに、答えない  
とこれ以上はやせそうだ。

「まだ、起きて…ああよ」

「蒼雅さん、起きてくれた」

「完全に墮ちたわけじゃないんですけど。墮つていいですか？」

「そんなこと…言わないでください」

「痛い、痛い、離してください」

体を絞めないで欲しい。本当に墮ちてしまつ。

「あ…」めぐなさ」

それでも手を掴むのか。これと云つて不都合も無いが、皆のところへ行きたい。向こうが無事なのは確かめるべくもないが、それでも…

「じつやられましたね。私が残るべきでした…」

「鈴谷さん…何で此処に」

鈴谷さんが来るところとは、危険は無くなつたところなのだと云ふ。

「もう全ては終わつたからですよ。と云つましても、あれを奪われましたが…」

「あれ…って、まさかあのサンプルを…」

「私個人の確認です。大きい声で言わないよ！」。それと彼は貴女の思ひほど脆い存在ではありますよ」

「そう…ですか？」

「そうですねとも、彼の意志で此処に来たのです。といつても、まさか闘つてたなんて…私も想定外でした」

「あの、鈴谷さん、襲ってきた奴等は一体…」

正体不明の敵にやられればかりではあまりいい気分はしない。セイバーに開示義務というものは存在しないが、個人的な意見ならば守秘義務は関係ないはずだ。

「ええ、詳しく述べるほど。敵は全て倒しましたが、ソード無しはもう嫌ですね。それよりも貴方の事態の言い訳を考えましょう」

「あ、じゃあ転んだってどうですか？」

現実的に考えてそれは不可能だ。この傷は転んだどころで出来る傷ではない。

「雛乃さん、それはけつと無理です」

「ええまつたく。ヒメはそういうことは苦手ですね」

「とりあえず、制服に着替えて、怪我は隠す」とこします

まさかこんなことを雛乃さんが言つなんて… 聰明そうだと思つては、そりではなかつたようだ。

「それが妥当ですね。ヒメもそれで良いですよね？」

「はい、勿論です…」

ならば早速と一人に急かされ、戻つて制服を着た。

「はあ、昨日に続き、なんだかな」

「それはお疲れ様です。では私達はこの辺で行きましょう、ヒメ」

「はい。じゃあ蒼雅さん、また明日」

「はい……また明日?」

「あとこれは、電話番号を書いた紙です、落ち着いたらこれに掛け  
てください」

そういうふうと数字を書き込んだメモ用紙が渡された。

「分かりました」

雛乃さんの言葉は何だかしつくりこないが、まあ良いか。  
それはさておき、体が治るのに二日くらい掛かりそうだ。後、この  
ぼうぼうのセイバーの服のレプリカは持つて帰るのだらうか。

「あの」

「一人に訊いたが、居なかつた。置きっぱなしとこいつのもどうかと思つので、元あつた小包に入れて持つて帰つた。

「おひへ、蒼騎……やつと戻つてきたか、遅くなつてたな

「蒼騎君、やつと戻つて来てくれた。怖かつたのよ～これでも

「伝説の鈴谷颯が来てくれたんだぜー！」

知つてこる。行くと明言したところから知つてこる。

「ああ……もう帰つたけど…」

「探してみないと何もいえないじゃんか。サイン貰つて来てくれるよ

「多分、居ても無理だと思つた。ところが、帰つたと言つたわ」

「で、先生、もうやめるやつ帰るんですよね？」

あれだけのことが起つたまま居るのは思えない。

「颯様が帰つてしまえば居る意味も無いわよ～

「じゃあ…やつをと帰つましょつか」

「やつね。皆歸るし、帰りましょつか。あ、とにかく蒼騎君、セイバーの服はびうじたの？」

答えても良い。しかし、現物は見せられない…

「あ、それ俺も見たい」

翔太よ、見たら悲しむことは保障できる。

「あ……なんだかんだけで受け取れなかつたです」

「何か悲しいね、蒼騎君」

「右に同じ」

「同情するのならタオルをくれ。【貸して】じゃないよ」

「何でタオルなんだ？まあ、スポーツタオルだつたらいいっぱいあるからいいけど」

「切るけど良い？」

「そもそもあげるわけだし、家に腐るまであるから良こせ……どうするんだよ？」

「包帯にある」

「どうしたんだ？」

「……転んだ」

「は～い階ひいちに来て、バス来たよ」

集合してからふと思つたが、皆は結構落ち着いている。鈴谷さんのお陰だらうか…やつ思つと凄い。流石は伝説といつたところだ…

1 a s s 的には一段階しか違わないが、F tchは別格だ。

質ではなく、一人であるにもかかわらず、二つの能力か…まあ、自分は「これで十分過ぎるかな。気分を変えようと本を広げる。

「 その果てへ、続きし道は遠くとも、この翼と・・・・・を  
持つて、キミは…」

もう欠落がある章だったのか。古い時代の神話を解読して若干脚色をして書籍にしたというもので興味がそそられたが、風化していくどうしても解読出来ない所があるらしい。

〔その・・・・・の先には、幾多の影がある、しかし、・・・・・  
の手を取り向かうものも居る…キミは叫んだ・・・・・神は・・・・・  
つてみせる・・・・・の為 〕

最終章の文節は修復や解読はされないのか、古代の神話とは聞こえは良いが、どうも駄目だ。

「 なあ、蒼騎、読んでるそれって面白いのか?」

「うん…まあ、やうかな。他にもあるけど、見るか?」

「いや、遠慮しとくぜ」

「あ、やつだ。蒼騎君、体の具合…悪いでしょ」

「 実をこつと結構、悪いですか」

「隠そうとするのもいいけど、分かってるからね~これでも

いつもはともかく、こういうことでは流石だと思つ。が、人が多いこんなところで言わないで欲しい。こちらにても都合はあるし、痛みと血を止めるために氷で幕を張つている。日は浅いが、つくづく応用次第だと思うこの能力は…

「治そうか？ 今此処で…すぐ済むよ？」

「いえ、治す程じゃないので遠慮します」

今ここで知られる訳にはいかない。しかし、このままでは治る時間が掛かるので家に帰つてから絆創膏と湿布でも貼りうかな…何だかんだで皆は寝ている。自分も疲れたし睡眠という対価は正当だらう…

「なあ翔太、着いたら起こして」

「俺も寝るし、保障できないぜ？」

「どつちみち最終的に先生が…」

「無理」

ああ、これは無理だ。頭がガクガクしてまぶたは閉じそうだ。普通は起きておくべきではないのか、先生は…期待はしても無理だと思うが、眠いし寝よう…

誰だ、何だ…笑っている？悲しんでいる？音が、痛い、頭が、苦し

い、光、声？誰…！

「蒼騎」

「翔太…か…」

「蒼騎、酷くうなされてたぞ」

「昨日もこうだつたな」

寝ると耳鳴りか…おや、やけに体が軽い。

「先生？」

「颯様…つえ？」

軽く引いたが、それは置いておこう。

「学校？」

「残念ですが…道中です」

「着いてないなら、一度寝するからね」

先生を起こした意味はなかつたようだ。もつ寝る気にはならないし、残り少ない本でも見ておこう。

〔キミは傷つき……なかつた、微かに見えた……星の輝き、  
・・・・・・・・・取り・・・・握り・・・・眼差し・・・・・・  
神を・・・・・星となる〕

「…………が倒れ…………は微笑…………キ  
ミ…………流し…………思つ…………キミは気が付く、そ  
して、笑い…………た。…………は笑つて、泣いて……  
いた」

「全ては…………であ…………ある、しかし一つは永…  
・・あり…………神をも…………でき…………超えられる」

突然揺れが収まる。どうやら着いたようだ。一度よくこの神話はもう残ったページはない。そうだ、先生を起さないと…

「先生、起きましたよ。起きてください、起きてください」

「ん、おはようお蒼騎君」

「おはようお蒼騎さん、後は自分と先生だけですよ  
「あつれ～そんなに寝てた？」

「このやり取りはもう何十回目かだ。

「はい、2、30分くらい掛かりましたよ」

姉さんみたいだといつのは心中に留めておひつ。

「颯様の鬪い方、華麗だったな～」

「そうですか…」

見てみたかったが、仕方ないか…能力を試せただけでも儲けものか

な。無論怪我は採算に入れないと。

結局の所、事件は表向きには損害はあったが、一件落着した。という結果で終わつたらしい。学校では心身の負担が大きいとのことで翌日を休校にといわれ、何ともいえない気持ちのまま家に帰つた。しかし、結局の処何故身体が治る速度はこんなにも速いかは解らずじまいか。別段身体が丈夫というわけでもないのに、そんなことを考へている間に家に着いた。ドアを開け、リビングへ行くと、姉さんがテレビに食い入るように見ていた。

「あつれ～？これって隼君に似てるんだけどな」

テレビ……監視カメラの映像か。犯人逮捕のために流されているのだろうが……何！？自分達が戦つているところが……何を考えているんだ、鈴谷さん……

「あ、れ……姉さん」のコースは、研究所での襲撃事件？」

「うん、そなんだけど、これ隼君じゃない？」

指差している先は雛乃さんと自分だ。しかし、迂闊といふか、自分を映すメリットがないだろう。消せば良いのに……

「さあ？他人の空似じゃないかな。三人は居るつていうし……」

「ふうん……まあいいけど、おやつ要る？」

どうしようか……小腹も空いてきたので丁度良いか。

「ちなみにそのお菓子は何なの？」

「林檎のジーラートだよ。ちょっと問題があるんだけどね……」

「何なの、その問題つて?」

「いやーまだ出来てないんだよね」

「といつと?」

「まだね、凍つてないのよ……」

「ああ、それならちよつと見てくるよ」

冷凍庫の扉を開けて見てみるとまだ液体の状態だった。これでは林檎のジュースだ。容器に触れるとあることを思いついた。あの時、アイギスと叫んだ時、無意識にイメージをした。一瞬だけのイメージだが……盾が出来た。剣はイメージだけだったが、出来るのかも知れない。言葉でのイメージか……

「凍れ、固まれ……フリーーズ?」

どうやら無機物ではないので凍らないらしい。能力の限界だな。これ以上どうも出来ないので戻る。

「ね、凍つてないでしょ……」

「まあ、仕方がないよ。じゃあ、部屋に居るかい

部屋に入つてからふと思い出して携帯電話を取る。この番号だな……微妙な時間だが、落ち着いたらと言つていたので裏を反せば落ち着けば何時でも掛けていいことになる。かなり屁理屈な気がするが、いいだろ?。とりあえず電話をする。

「もしもし、雛乃さんですか？」

「本郷ですが、何方ですか？」

あれ……？一体誰だ……部署にかけたのだから当然といえば当然か。

「あの、雛乃さんの上司の方ですか？」

「ええ、一応父親だが、何方ですか、貴方は……」

「これは失礼しました。自分は蒼雅と申します」

「これは『一寧』に。で、銘に何か？」

色んな所で戸惑うな。だが……

「何かといいますか、電話をと言われたので、『この番号』に……」

「そうでしたか。では、宜しければ明日でもお越し下さい。これら住所を言いますので……」

「あ、はい。どうぞ」

住所を書いたメモと幾つかの疑問だけが残った。まあ、明日に行つてみるか……折角の休校だから。やっぱり少し疲労が残っているので横になつた。

……苦しい。気持ちが悪い…怖い。何だ…誰だ…白い髪…  
仮眠のつもりが結構寝てしまった。そして、やはりいい夢は見れなかつた。降りてみると、姉さんがたくさんの小魚と格闘していた。

「手伝おつか?」

「あ、隼君…うん、お願ひね」

さて、やるか…包丁を取つて、魚の頭を落とし、腹部の方に刃を滑らせてあらと臓物を落としていく。

30匹くらいだったが、ものの数分も掛からない、苦もない作業だ。そのはずなのに何故時間が掛かるかな…姉さんの分野の問題ということか。苦手ということなのだろうか、最初から頼めばやったのに…いつも変なところで遠慮するのだろうか、姉弟だろう、と少し複雑な気分だ。

「といつて、姉さんこれって揚げる? 焼く?」

「煮よつかと思つてるんだけど…」

「いや、これは小魚だから煮物はどうかと思つよ

「じゃ、かき揚げにしよ」

「かき揚げ? 唐揚げじゃなく」

「かき揚げなの」

小魚のかき揚げは聞いたことがないが、まあ良いだろう。

「分かつたよ」

「うん、ならわちんく、隼君野菜切つてー」

「分かつたよ」

結局通算で2時間くらい掛かった。

「じつただつきまーす!」

「いただきまます」

「美味しいな~」のかき揚げ

「もう、それはかき揚げじゃなくて大盛り天丼だよ」

「隼君、おかわりお願ひ

速いな。流石は姉さん…

「分かつたよ」

「特盛りで、お汁もお願い

「分かつたよ」

器を受け取り台所へ行く。ご飯を入れてから、かき揚げと天ぷらを乗せる。そして即興で作ったたれをかける。味噌汁も忘れずに…持つていぐ。

「隼君あつがと」

「はー、姉さん、そ、だ、あのアイス出来てたら貰つても良ー?」

「別に良いけど幾つ位欲しいの?」

「五つほどかな」

「三十個近くあるからもつひとつ持つて行つていこよ。でも、そのアイスどうするの?」

「知り合へのお土産かな……」

電話でしか会話してないが

「溶けなによいづくな」

「勿論分かってるよ」

金属の器に入れるので、もう溶けるわけは無いのだが……しかし、そんなに多めに作ったのか。姉さんは、謎は残るが、このまま部屋に上ることにした。

明日は休みだが、そこまで遠いところに行くし、寝ておつかな、電気を消す……

「ねえとい、うるさい……誰か、助けて……暗いなかに誰かが居る?君は、白い髪の……待つて、助けて、行かないで……音が収まった!何故君は微笑む、どうしてそんなに白いん

だ  
…

## 四話（前書き）

前回指摘があつたので近いうちで用語とかをあとがきに書いておきます。現在確認して作成中です。

光、朝なのか、もはや悪夢にも等しい「」の耳鳴りは、何か薬でも買おうかな、このままなら睡眠が苦痛になる。いつもより急いで着替える、そして下に行く。

そのままやや急ぎで朝食を作る。「」のまま何とかなりそうだ、一安心かな…だが、後は姉さんだと一瞬で焦りを取り戻し和室へ急ぐ。やはり此処か…急いでいるので仕方ない

「クルタナ」

小さく、それでいて再現する……掌にはアイスの棒位の小さな板のような剣が出来た。そしてそれを額に乗せる。

「…………ひやああ…？」

おっと、存外に効き目が強かつたか。まあ、今日急ぎは姉さんだから今日はちょっと我慢してもらひけど。

「起きた？姉さん」

「隼君、冷たいよく分からぬけど、もう止めてね、そういう起こし方」

「『』めんね、姉さん。でもこの調子だったら、たまにするかも

「うーん…出来るだけ止めてね」

「分かったよ」

「いつでも出来るナビ、控えめにしたほうが良いな。

「それはともかく、」飯作つてあるから

「やつたーじゃ、着替えていくから　　って…あれ? 隼君、今日学  
校は?」

「言つてなかつたかな? 今日は休校なんだ」

「そーなのかー! 羨ましいなー」

「やつなのぞ、じゃ仕上げがあるから」

とはいっても、後に残つてるのはテーブルに置くだけなんだけど…  
気楽に台所に行く。そのままぱつとテーブルに作った朝食を並べて  
いく。ついでに今アイスも用意しておいつ。

「隼君、今日の『』飯は何?」

「トーストとベーコンゴシグあとサラダ最後に余りもの林檎の千  
枚漬け、砂糖の」

「ジャム?」

「みたいな物かな、トーストに乗せると案外いけるよ

「じゃ、お弁当は?」

「煮物主体のおかずと漬け物かな」

「和風だねー」

「朝食と弁当はそこに置いておくから」

「あれ、もう行っちゃうの?」

「まあ、そこそこ遠いから念のため。だね」

「じゃ気を付けて、あとアイス溶かさないよ」

「大丈夫だよ、それより姉さんはいいの? こんな時間だけど」

「ああ…」そのままじゃいけない

そういうえば、こんな毎日の積み重ねで慣れたが、最初のころは自覚まし時計の音で自分も起きて、手伝いをしていくうちに自分が主体から最終的に担当になつた。変に昔を思い出してなんだかくすぐつたいような気分になつたので、さつさと振り払つた。靴も履いて、意気揚々と扉を開ける。それから、立て掛けたるスケートボードを取る。結構距離があるのでこれに乗つて行く方が都合は良くなる。特別少々いじつてあるが問題無く動くので少し安心した。乗つてから思ったが、俺以外動かせない。そんなことはさておこう。乗つて進んでいく。でも、そのまま速度は落とさず進む。時々休憩がてら箱の中を見て、溶けかかってすらないのだが、この間に容器の淵に触れて内部の空気を冷やしておく。段々と慣れてきたな、この能力にも。

地図と標識それから、教えてもらつた住所を比較して……案外来ているな……あともう少しか。と、ここで結構な回数冷やしていたが、あと数回もせずに着きそつた。

それから、幾分もしない間に着いた。

「はあ…さて、どうなるやう…」

指定された場所は事務所でもなんでもなく、普通の家だった。多少の心配はあるが、インター ホンを鳴らしてみる、それからものの数秒で玄関が開けられた。

「よつじんや、蒼雅君…でしたかな？」

低く少し重たいそんな声、見た目も全く相違無い屈強な男性だ。

「はい、蒼雅隼騎です。身分証明のH.Dでも見せましょうか？」

「いやいや、そこまで神経質ではない。まあ、立ち話もなんですので…ひらへ

「あ、その前に…」

「それは一体なんですかな?」

「林檎で作ったジエラートです。溶けやすいのですぐに冷凍庫に入れてください」

「うーん…」

そして客間に案内されたが、基本的に空気が重い。住所を間違つて

はいない筈だが…本当に雛乃さんは嘘のだらうが…

「わい、蒼雅君…君を此処へ呼んだ理由は解かっているかね?」

「大まかには…解かっているつもりですが…」

「わいのか、まさか」の口が来よつとせ、あいつになんて言つか……

「あいつ…ビリこう意味ですか?」

「おや、知つてこると思つたんだが…」

全く聞いていない。話の中の欠片にも出てきた覚えがない。まさか  
鈴谷さんのことではない筈だし、記憶力は悪い方ではないと思つ  
だが…

「多分知らない」と思います

「わいのか、では簡単に説明しよう。君も知つての通り、私の苗字は  
本郷で、娘が雛乃という理由だが、銘は雛乃の忘れ形見でね」

「わうだつたんですか……」

「銘から聞かずに?」

「といいますか…雛乃さんのことはそこまで、といつよつも、ほと  
んど知らないんですけど…」

一度ほどしか会っていないのにそんな深いところまでこえる仲にな  
るとは思えない。

「……はて、意味が解かりませんが？」

「覚えている限りですけど、雛乃さんとはまだ一、三回位しか会つていませんが」

「何でそんな男に、銘は好意を抱いたんだ！」

突然叫ぶとは、結構な音量だ。下手をすれば近所迷惑になりかねない程の…

「貴様、能力で銘になにかしたか？」

後ろに回られ……絞め殺される！？しかし、何かを言うにも答えられない。息が…でもこのままでは確実に墮ちるので、頑張らないと…

「じ、自分の能力は、こお……」

しかし残念ながら、視界は暗転した。

暗いが、前とは違つ。見える、でも結局痛みと、恐怖が体から抜けない。そんな状態で思つた。あの白い子にもう一度逢わないと…痛みが、酷くなってきた。

なんだらう、突然景色が変わつた。此処は、廊下？？それに壁一面にドア。その一直線に伸びた道の先に白いあの子。確認したのか、すぐに走り出した。あの子は華奢な子供なのだが、いくら走ろうとも、追いつけない。その最中、あの子は突然ひとつ目のドアに手を掛

け、その中にに入った。

そのまま田を閉じていく。  
そのまま田を閉じていく。

「へ……？？」

起き上がる。どうやらそんなに長こと気絶はしてなかつたようだ。

「蒼雅君、さつきは取り乱してしまつた…済まない、君の能力は何なんだ？」

どうやら正気に戻つてくれたようだ。自分はどうこつ誤解を掛けられていたのか…

「はい。自分の能力は、氷の発生や触れたものを凍らせる能力です。一部例外はあります…で、自分が墮ちる前、本郷さんが仰られた」とは、どういう意味ですか？」

「どうも」「どうも…」

「ふわあ～お父ちゃん、おなかすいたよ～」

すく寝ぼけた、離乃さん？寝ていたのか。人が窮地という時にも関わらずというか、睡眠に対するその力は姉さん並みだ…

「銘、起きたか。蒼雅君が来ているぞ」

「じょりがさん？」

「おはよう」「やこます、離乃さん。一応注意しますけど、さつきか

「…まだけています」  
パジャマで寝ていて、おまけに滑舌が悪いのですよ。それと…非常に匂いが悪いですけど、

「ふえ…あれ、蒼雅さん？？」

俺を確認する前に、髪くらいうまく梳けばいいのに。<sup>と</sup>そして、パジャマのボタンはするべきだ。

「難乃さん、どういり口ですか？」

え……うああ！！！待てててて下せー！」

着ている緋色のパジャマの胸元に赤くなつて、雛乃さんは何処かへ行つた。

- 7 -

- 1 -

一  
あの「

一  
何  
か  
な  
?

「その、会話の続きをお願い出来ますか？」

「いや、それがもう何がなんだか分からなくなつてきてね。銘を待つてもらえるか?」

「はい」

それから数分後、まともな服になつた雛乃さんと三人でいくらか話した。ただ、服は変わつても顔の赤みはそこまで引いてはいなかつた上、髪も梳かず、酷いものだつた。

「じゃあ…あの番号を書いた紙は、本来雛乃さんの所属部署を書く箇だつたんですか？」

「はい、「めんなさい…」

「いえ、責めているわけじゃありません」

「はい……」

明らかに浮かない顔をしてくる。確認していない自分が悪いのか…どうなのだろう。

「わつじえば銘、頂いたお菓子を食べるか？」

本郷さん、ナイスフォローだ。

「うそ、私持つてくる…」

そう言つと急ぎ早に何処かへ行つた。

「うあー。」

平面上で躊躇なんて本当に緊張しているらしく。それから間もなく、

ドンという音がしたが、大体予想がついた。その後ジヨラートヒスローンを持ってきてくれた。

「美味しいです」

「確かに美味しい、これは一体どこの商品かな？」

「あ、それは姉さんが作ったものなので」

「何と、それは驚いた…」

「また食べたいです」

「姉さん次第だと思つので、約束は出来ませんが、もしいれば持つて来ます」

「ありがとうございます」

明るく笑った顔を見て、安心した。

「難乃さん、そういうばついた話があつたのですか？」

「んぐ…えと、それはですね…セイバーの訓練とか心構えがありました」

「そうですか、自分は結局セイバーに入る　ということになるんですねか？」

「はい。あの時の貴方の行動は嘘じゃなかつた。って、信じている

ので

「それってあの時の……」

「せつです。嬉しかった……あの時はだめだったから……」

良くない経験があったのか、せつもまだの明るいものが無くなってしまった。

「あ、こんな」と、蒼雅さんは言つた。「めんなれこ」

「ええ、じつは辛こいとを聞いてしまつて」

「お父さんみたい」

「えー?」

みたって、本郷さんのことなのだろうか……少なからず信頼していく  
れているところ嬉しかる、微妙な気分が拮抗している。

「わづか、蒼雅君びつり君を誤解していた」

「ええ、気にしません」

「蒼雅さん、今日は私のせいですみません……」

「気にしないで下さい。今更ですが、結構楽しかったです

「ほんとですか?」

「勿論本当ですよよ」

「そうだ、蒼雅君。君には遅かれ早かれ多くの試練が待っている。  
そんな気がしてならない」

「そうなりますか…」

「ああ、遅ければいいがな。まあ儂の勘なんぞあてになるものでは  
ないから聞き流してくれ」

「その間に経験を積めれば、良いですけど…」

「あひんと解つていいのだな。将来が楽しみだ」

「あ、お父さんも同じことを言つてる」

「それは話してみれば当たり前とも思つがな」

「嘘やつ囁つね

そんな人ばかりなのだろうか…ふと時計を見る。結構な時間だった。

「申し訳ないのですが、この辺りでおことまわせでていただいくても良  
いですか？」

「あ、もちろん時間ですか。それでは蒼雅さんまた今度会いまし  
ょ」

「ありがとうございます、家に来てくれ

「ありがとうござります」

扉を開け、進むと、

「「反対だよ／逆ですよ」」

「……案内をお願いできますか？」

「私が行きますよ」

そしてその後を着いていき玄関に着いた。

「今日は楽しかつたですか？」

「楽しかつたですよ」

絞められた事以外　　といつのま心中だけの話だ。

「じゃあ、また来てくださいね、絶対に」

「はい、絶対に…」

そうじつてスケートボードに乗り、進む。来る時と違つて、少し車輪が不安定になつてゐる。帰つてから調整が要るとも思いながら、スピードは下げるに帰つた。

家に着き扉を開けて、そのままスケートボードを自分の部屋に持つていき、分解する。案の定ベアリングの部分がお釈迦になつっていた。

「寿命…か。これは買つて付け直しかな…」

時間帯もまだ遅くはないので、買いに行くことにした。ボードは使えないで走るしかない…家を出て数分くらいで着いた。

「おひへ、兄ちゃん。どりしたよ?」

作業服を着た中年の男性が出てきた。人当たりがいい店主だ。

「まあ…正規品はどうも速度が遅くて。解かっているつもりですけどね、これでも」

「まあ、こいけどよ。今回ほどれにする?」

「やうですね…これをお願いします」

「これで田利きはいいんだからな、兄ちゃんは…はいよ、まいどあり、あんまりいじくんなんよ」

「保障は無いけど善処しようかな」

「そういうえば、兄ちゃん、例の学園祭はまだなのか?」

すっかり忘れていた。今の学年からレクリエーション名目で無理がない程度に戦い合つといつ、自分には理解出来ない学校行事があった。ちなみに翔太が勝手にエントリー用紙に名前を書いたので参加することになつている。

「明日だと思います…いえ、明日です」

「なんだ、あるんじゃねえか」

何も準備してなかつた。とこいつか一週間前に連絡されていたの?…  
せめて防具は…あのレプリカの服で良いか。武器は…こちらは何も  
無い。別に能力のテストみたいな物だから氷を使つても良いのだろ  
うけど、十中八九まずいだらう。どうするか…

「あの、ちゅうとこいですか?」

「何だい、兄ちゃん?」

「なんか武器みたいなの置いてるわけ…ないですか?」

「おこおこ、ここにボーダー類を扱つてゐる店だぜ?……武器が無いこ  
ともないけどよ」

「どうだどう…でも、好都合だ。

「どんなものがありますか?」

「ここののだけど……」

悪いもののじゃない。これは仕込み機能を持つてゐるナイフか…

「ここのナイフは幾らですか?」

「ああ、ここの中のもんは売り物じゃないからおまけでいいぜ

「良こんですか?」

「男に」「貰はねえよ」

「じゃ、ありがたく三本程。後、かなり薄めの鉄板はありますか?」

「オーダーメイドのボードに使つ余りがあるつちやあるけど…」

「いくらか貰つていいですか?」

「どうせ売りもんにはならねえから好きなだけもってけよ」

これで武器、防具ともに一安心かな。そんなことを思いながらも足取りは軽く帰っていた。

帰つてすぐにスケートボードの調整を始めて直りはしたが、改造までの時間は無かつた。それよりもあのレプリカの服に鉄板を縫込み、ナイフ用のポケットを作つた。

「サイズは良いんだけど、やっぱり重くなるな…」

体に慣らす為に着てこむとした。そんな最中部屋の扉が開いた。

「隼君、おそくなつてごめんね　なにその格好?」

「セイバーの服、レプリカだけど」

色々と手を加えてあるから実物にも劣らない代物だが…

「じゃ、ご飯作つてるね」

そうこうつて姉さんは下に降りていった、それから一時間強が過ぎ去

つた頃も「特にせん」ともないのではなくて降りた。

「姉さん、『』飯は出来た?..」

「うへん…あとむづけよつとなの、待つてね

「分かつたよ

疲労感が抜けないため軽くシャワーを浴びて部屋へと戻った。そういえば、結局服を着たままだった。ナイフ一本一本を確認して服の中の新しく作ったポケットへとしまう。それも終わり、さつとハンガーに掛けベッドに横になつた。少し休んでいると、

「隼君、『』飯出来たからちよつと手伝つて

「分かつたよ

「何を手伝つの?..」

そつ言つて多少早足に降りていぐ。

「食器を並べてね

「分かつたよ

そつ言つて台所に行き、グラスや箸を持っていった。

「ありがとね、隼君

「別にいこよこの位

「へん良い弟だから、姉さん幸せだよ」

「わい……」

「冷たいな、隼君」

「一つの意味で当たりだよ。なんて、言えないがやう思つておく。

「美味しかったよ。」駆走様

「おやめなれ」

「じやあもつねるよ、お休み姉さん」

「うそ、お休み隼君」

マイペースに階段を上がつてこき、そして部屋に入る。再度ベッドに横になり、眠りこづく。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4620p/>

---

平行結晶

2011年10月7日22時23分発行